

道路政策の質の向上に資する技術研究開発

【研究状況報告書（2年目の研究課題対象）】

研究代表者		氏名（ふりがな）		所属		役職	
		堀 繁（ほり しげる）		東京大学 アジア生物資源 環境研究センター		教授	
研究 テーマ	名称	集客地の活性化に資する、道路のホスピタリティ表現手法についての 研究開発					
	政策 領域	[主領域]5(美しい景観と快適で質の 高い道空間の創出)		公募 タイプ	(政策実現型)		
[副領域]							
研究経費 (委託金額) (単位：千円)		平成17年度		平成18年度		研究期間	
		9,500		9,500		平成17～19年度(3年)	
研究者氏名							
氏名				所属・役職			
篠原 修				政策研究大学院大学・教授			
内藤 廣				東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻・教授			
中井 祐				東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻・助教授			
研究の目的・目標							
<p>観光地、温泉地、商店街など、集客地の多くが苦戦しているのは、それらの地区が来訪者にとって楽しく見えないからで、それには道路が魅力的でないことも大きく影響しており、特に人に対するもてなしの表現、つまりホスピタリティ表現が不十分なためと考えられる。そこで、本研究開発は、道路にホスピタリティ表現を施すことで、苦戦している集客地を活性化することを目的として、道路のホスピタリティ表現について、1)その概念整理、2)表現の型の分類整理、3)型ごとの計画・デザイン原則など整備時の留意点の整理をおこなうものである。</p> <p>最大の目標は、集客地整備の実際の手である商店主・旅館主・住民や市町村職員等が、このホスピタリティ表現の重要性やポイントをじゅうぶん理解できるようにすることであり、「やれば自分たちの街もよくなりそうだ」と思うように、わかりやすく纏めることにある。</p>							

これまでの研究経過

新道路技術会議の意見を踏まえ、今年度は道路に留まらず、サービスエリア、道の駅を対象に加えた。旧道（、トイレ）は手を付けていないが、これについては来年度集中的に取り上げたい。サービスエリア、道の駅は、合わせて25例程を調査したが、ホスピタリティ表現の観点からは両者は似ており、例えば園地は前面植栽が多くパーキングエリアから園地内部が見えず、建物は直線の壁に囲まれた硬い表情で、いずれも人を誘い込もうとしない、拒む表情となっているなど、その問題点がおおよそ明らかとなったので、これを整理しつつある。ただし、物販購入・飲食などの商品の魅力が集客に直結するこれらの集客施設は、観光地や商店街などまち歩きの魅力が集客に大きく影響する集客地ほどには、多くの場合ホスピタリティ表現が影響を与えないと思われた。

また、「道路」については、これも指摘に従い、「街」の観点をに入れて整理をおこない、「道路のホスピタリティ」の前に「街のホスピタリティ」を盛り込むこととし、そのための事例の収集・再整理をおこなった。街では、「道」、「沿道建物」に加えて「滞留拠点」がホスピタリティに影響を与えていると思われた。さらに、自動車や自転車利用者の視点を入れ、彼らにとっての街のホスピタリティを整理している。

ホスピタリティ表現の概念整理とタイプ分類がおおよそ済み、まとめつつあり、最終の目的である「事例集」についても構成を固め、事例集の中心となる、「型に基づく事例紹介とその解説」について、出来上がりのページイメージがわかるようにいくつかを纏めた。

研究成果の発表状況

学術誌への発表はないが、以下の論説は本研究での検討を踏まえたものである。

堀繁：世界遺産と都市の魅力：道路と自然 134号 P.10-14, (社)道路緑化保全協会, 2007.1.

堀繁：景観から見た市街地のにぎわいを創出する魅力ある道づくり・店づくり：

開発こうほう No.522 P.26 - 32, (財)北海道開発協会, 2007.1.

堀繁：「人間のための道具でしかない自動車は人間のための街の中では遠慮しろ」という欧米の道路表現：都市計画家 planners 50 P.14-15, (NPO)都市計画家協会, 2006.5.

研究成果の活用方策

本研究は、苦戦する全国の温泉地、観光地、商店街などの集客地において、道路整備や活性化事業をおこなう際、集客のためにはどんなことに留意して、何をしたらよいか（あるいは、しても効果がないか）をわかりやすく、事例集のような形で整理しようとするものである。

したがって、集客地の道路整備の計画・設計段階でそのまま活用頂ければ、集客のための工夫がそのまま参考になると期待している。特に、国民全体の消費低迷、国内宿泊客全体の減少、郊外型大規模店舗の出現など外的要因が大きくて自分のまちが集客出来ないとあきらめている商工関係者や地域の方々に、「活性化が果たせるかもしれない、工夫してみようか」と自助努力を元気づけることが出来ればと、考えている。そこで、道路関係者だけでなく、集客地のまちづくり、活性化に関わる多くの人々にこの事例集を見てもらうことが本研究成果の活用手段となる。

集客地をホスピタリティの観点から魅力的にするには、道路だけではもちろん不十分で、沿道の建物、滞留拠点のホスピタリティもたいへん重要である。したがって、集客地の活性化という観点からは、この建物、拠点の研究が今後の課題となってくる。

特記事項

（特記）本研究は、学術上の新たな知見の獲得を目指すというより、集客地の人々に活性化のためのツールを提供する実用研究を目指している。そこが特徴であろう。

（自己評価）同じベンチであっても、置く位置がちょっと違うだけで全く魅力が異なるといったように、ホスピタリティ表現の良い悪いでは「ちょっとの違いが大違い」であることが多い。そのため、その「ちょっとの違い」をわかりやすく解説するために、ちょっとずつ違う事例が沢山必要である。その点、豊富に事例が収集出来たとはまだ言えないと思う。今年度は契約が大幅にずれ込み、それまで調査旅行をおこなわなかったことが大きい。最終年度は、その反省に立って、精力的に効率よく収集する計画を立てる必要がある。

また、PRパンフがあるような場合はともかく、たいていは、事例集に載せられるような図面は用意されていない。あるいは、古い整備も含めて、図面が頂けない場合も多い。したがって、図面はあまり収集できていない。

しかし、研究終了時、「事例集」がほぼ仕上がる見通しは立ったと考えている。